

目次

序……………久保田 淳…一

凡例……………二

序説……………五

第一部 『古事談』の研究

第一章 『古事談』の成立と本文……………五

1 『古事談』の作者と成立年代……………三五

2 『古事談』の諸本……………三七

3 『古事談抄』・『古事談抜書』について……………三六

4 『古事談』の本文系統……………三三

第二章 『古事談』卷一王道后宮の構成……………三六

第一節 卷一王道后宮の収載話……………三六

后宮話の所在……………四〇

第二節 後三条天皇記事群の検討……………四三

第三節 一条天皇記事群の検討……………四六

第四節 王道の叙述……………四七

1	卷一の巻頭・巻末話	七四
2	『古事談』と『続古事談』・『愚管抄』	八〇
第三章 『古事談』と『中外抄』・『富家語』		
1	二つの円明寺	九〇
2	小野宮殿と一条殿	九五
3	叙述の明確化	一〇三
第四章 『古事談』巻二臣節・巻三僧行の構成		
第一節 巻二の構成		
1	巻二の巻頭話	一一一
2	巻二の記事配列	一二六
3	巻二の巻末話	一二二
別表 巻二臣節の全標題と記事配列		
第二節 巻三の構成		
1	『古事談』巻一〜四の巻名	一二九
2	巻三の記事配列	一三〇
3	巻三の巻頭・巻末話	一三七
第五章 『古事談』の勇士像		
第一節 貴族の見た勇士像		
		一四三

第二節 説話集の勇士像		
		一四四
第三節 勇と武		
		一五五
第四節 巻四の巻頭・巻末話		
		一六一
第六章 『古事談』巻五・巻六の構成——『古事談』の展望		
第一節 人の世界、事物の世界		
1	巻五神社仏寺の構成	一六六
2	巻六亭宅諸道の構成	一七〇
3	同時代資料の諸道	一七三
4	巻五・巻六の構想	一七四
第二節 巻頭・巻末話の選択——はじめとおわり		
1	巻五・巻六の巻頭話	一七五
2	巻五・巻六の巻末話	一七七
第三節 『古事談』の展望——説話文学史との往還		
		一八一
第二部 『中外抄』・『富家語』と院政期中原氏の基礎的研究		
第一章 『中外抄』・『富家語』の基礎的研究		
1	『中外抄』上下巻・『富家語』の奥書	一八三
2	橘以経と源顕兼	一八五
3	橘以長と高階仲行	一八六

第二章 院政期局務家中原氏の基礎的研究

中原師憲 ..... 二〇二

中原師安 ..... 二〇三

中原師清 ..... 二〇七

中原師元 ..... 二〇八

第三章 故実説話のメカニズム

1 歴史叙述の場 ..... 二二四

2 記録と口承 ..... 二三〇

3 『中外抄』・『富家語』の意味するもの ..... 二三三

結語に代えて——故実説話から見た説話文学史 ..... 二三七

『古事談』説話番号・標題一覧 ..... 二三一

参考文献一覧 ..... 二五九

既発表論文と本書との関係 ..... 二六五

あとがき ..... 二六七

索引 ..... 二七〇

院政期説話集の研究

# 第一章 『古事談』の成立と本文

## 1 『古事談』の作者と成立年代

『古事談』の記事の検討に入る前に、『古事談』の作者と成立年代について確認しておきたい。現在この問題は以下のように考えられている。

『本朝書籍目録』に六卷、(注1) 源兼兼の著作であることについては格別の異論はみえない。『遠碧軒記』に(注2) 源兼兼とあるのは明らかに誤である。内容においても源兼兼を否定すべき箇所はみえず、むしろ源兼兼の著として相応すべき点がある。本書第三僧行の中に、「大納言法印良宴、建曆二年九月、於雲居寺房入滅(春秋八十六也)」とみえ、『続古事談』の成立はその序文(マ)により建保七年であるから、建曆二年(一一二二)以後建保七年(一一二九)の間に成立したとみなくてはならない。しかし源兼兼は建曆元年三月に出家し、建保三年二月、五十六歳で薨じている。(注3) 即ち建曆二年九月より建保三年二月の間の成立と考えられる。

源兼兼は村上源氏で、従三位刑部卿宗雅の息、母は石清水八幡別当紀光清女である(『尊卑分脈』『公卿補任』)。初め兼綱と名乗り、後に源兼と改名した。(注4)

藤原忠通女皇嘉門院(崇徳天皇中宮)の御給によって叙位されたのを振り出しに、後白河上皇皇女殷富門院(安徳天皇准后)の御給により従四位上、正四位下と順調に官位を進めた源兼だが、後鳥羽上皇をはじめ周囲の者の反感を買ったらしく、上皇の御前の遊びの席で、人々からいためつけられたことがあった。